

発表要旨

氏名：劉 迎春（ツェツェン）

氏名のローマ字表記：Liu Yingchun (Tsetsen)

所属：京都大学大学文書館 125 年史編集室

専門分野：近代内モンゴル教育史・女性史・ジェンダー史

1903 年における喀喇沁王グンサンノルブの日本遊歴とその真相

—なぜ「極秘」の来日だったのか—

1903 年に、大阪で第 5 回内国勸業博覧会が開催されることになった。当時、日露戦争への備えの一環として、駐清国日本公使館は博覧会の観覧を名目に清朝政府の官吏や地方有力者の来日を積極的に「勧誘」した。その中で、内モンゴルの喀喇沁右翼旗ザサグ郡王グンサンノルブ（1872-1931）一行も「極秘」に来日し、帰り道に南清地方への視察を果たしたことがよく知られている。

グンサンノルブの日本遊歴という経験は、彼の試みた様々な革新活動への影響はもちろんだが、とりわけモンゴル人女子学校教育の始まりを可能にしたという意味で大きな役割を果たしている。にもかかわらず、彼の日本での行動や具体的な旅行日程さえ明らかにされていない。さらに、「極秘」とはいったい誰に対するものなのか？そしてどのような手段で、どこまで「極秘」にした／することができたのか。そもそもなぜ「極秘」にしなければならなかったのか？といった一連の疑問点は未だに解明されておらず、ほぼ密封のままに歴史の中で眠っているのが実情である。

そこで本発表では、日本陸軍内部資料と当事者の書簡及び国内外の新聞記事などを用いて、グンサンノルブの日本遊歴をめぐる一連の疑問点に答えるとともに、彼の日本での行動及び南清地方の視察活動をも含めて詳細に検討し、その「極秘」の真相を浮かび上がらせることを目的とする。

「極秘」的な行動に関する基本状況の解明はもとより、関連する事実関係を正確に把握し、その社会背景を明らかにすることは、内モンゴル近代史研究において重要な意義を有する。同時に、このような試みはモンゴル人女子教育史研究の基礎的な考察にもなるだろう。